

届け 世界の果てまでも

令和3年 2月 2日

No. 62

文責 校長 飯久保一男

2月より、また、タイトルをマイナーチェンジしました。
日本第3位の高峰「間ノ岳」(南アルプス)

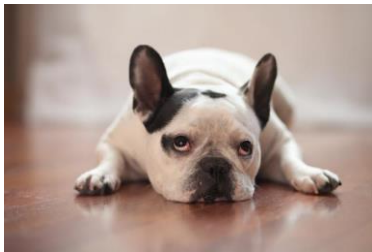
間ノ岳…2014(平成26)年4月1日に標高の改定に伴い、標高が3189.13mから3189.50mに改定され、それまで日本4位の標高であったが、3位の奥穂高岳と同じ標高となり、3位となった。日本の標高1~3位の山は、山梨県にある。南アルプス(赤石山脈)は、今でも少しずつ隆起している?

何を聞いても「別に…」

成長とともに無口になっていく子どもは、多いものです。小さいころのように、無邪気に自分を表現することが、恥ずかしいとか、カッコ悪いとさえ思う子どももいるようです。質問をしても、つれない答えしか返ってこないことが多くなるのは反抗期や思春期の親子の会話の典型です。

親「今日は学校でどんなことがあったの？」 子ども「別に…」

親「最近是谁と仲がいいの？」 子ども「別に…」



この「別に…」は、心の中にあるふれてほしくない部分に踏み込んでほしくない気持ちの表れだといわれます。「誰と仲がいいの」と聞かれたら答えてもいいのですが、その質問に答えると「その〇〇くんとどんな話をするの?」とか「〇〇くんってどんな子なの?」などと話が広がっていくことが予想されます。それがイヤなのです。そこから先は話したくないところへ踏み込んでほしくないので、始めから「別に…」と予防線を張るわけです。他にも

親「おなかすいてるんじゃないの？」 子ども「微妙…」

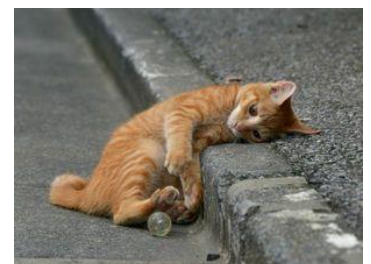
親「学校は楽しい？」 子ども「普通…」

などの返答が多くなる場合があります。ときにはその態度に腹が立ったり「まったく会話が成り立たない」と嘆かわしく思ったりするかもしれませんが、こういう返答は「心配してくれてありがとう」と言っていると思えばいいそうです。

こういう時期の子どもには、質問攻めはやめた方がいいようです。特に、母親は子どものことを全部知りたいと思う傾向にあります。思春期にさしかかる前なら、子どももそれに応じてくれますが、思春期ともなると、親とは違う価値観をもち始め、自分の中に、ふれてほしくないことをもち始める時期です。いくら相手が親だからといって、何でもかんでも話せるわけではなくなるのです。

思春期までは、子どもに警戒心がないので、親が知りたいことを子どもに根掘り葉掘り聞くような会話のパターンでもうまくいきます。しかし、思春期以降は、子どもが話したいことにしっかり耳を傾けて聞く姿勢に転換していく必要があります。

思春期に入ると、大人なのか子どもなのか自分自身でもうまく解決できず、揺れ動きながら、自分の価値観をつくりながら、自立をしていきます。子どもを会話の中心においたコミュニケーションが大切な時期です。大人として扱うことで、自己肯定感を高める支援となる時期なのです。



親が質問ばかりしていると、子どもは自分の話したいことを切り出すタイミングを失ってしまいます。その結果、親子の会話はどんどんなくなっていきます。「別に…」は、「お母さん、ちょっと質問しすぎ」というサインともいえます。

思春期になったら、子どもを一人前(本当は半人前ですけれど…)の大人だと思って、対応しなければなりません。以前、この紙面で「親も子どもに育てられる」(ホームページより、[バックナンバー30](#)を参照してください)という内容を書かせてもらっています。子どもの成長とともに、親も成長し、子どもへの対応を考えていかなければなりません。いつまでも対応を変えない親は、子どもの成長にとって、危険な親になりかねません。

早稲田大学名誉教授の加藤諦三さんのコラムです。

※わかりやすくするために、一部言葉を変えてあります。

子どもが体調を崩して食欲がない…。

母親Aは「何か食べる？」と聞く。食欲のない子どもは、すぐには答えられないので「別に」と言う。食欲がないのに「何か食べる？」と聞かれたことで子どもは少しイライラする。母親は何をつくっていいかわからないので「何か言ってよ」と言う。すると子どもはブスツとして「オムレツ」と言う。やがて出されてきたオムレツを見て、体調のいいときに食べておいしかったオムレツをイメージしていたのだが、それが今、体調の悪いときにはおいしそうには見えない。胸がムカムカして食べる気にはならない。母親はそれを見て「せっかくつくったのに」と思う。親も子どもも何かイライラしてしまう…。

母親Bの場合、子どもの体調が悪いのを見ても「何か食べる？」とは聞かない。小さいお茶碗にお粥をもってくる。そばには小さい梅干しがある。これなら子どもは食べられる。そして「よかったね、全部食べたね、すぐによくなるよ」と言う。1時間後にまた果物なり、アイスクリームなり、ジュースなりをもってくる。次は白いご飯にネギとショウガで汁をもっていく。この母親は日頃から子どもの好きな食べ物を知っている。それを体調の悪い子どもが食べられるようにして出してあげる。だから「何か食べる？」とは聞かない。



自分の思い込みの強い母親Aは子どもを見ていない。だから子どもの求めているものを理解できていない。愛情のある母親Bは子どもを見ている。この子は「このジュース」が好きだと知っている。いつも子どもをよく分かっているから、体調を崩したときには、子どもの好きなジュースを黙って出してあげられる。「愛している」とは「分かっている」ということでもある。

子どもが心理的に成長するには、母親Bのような愛情が必要なのである。子どもを心理的に成長させる愛情とは、子どもが求めていることを理解できる能力である。もともと愛情とは相手の求めているものを理解できる能力である。

思い込みの強い人は相手が何を求めているかを理解できない。子どもが何を求めているかを理解できない。だからどんなに子育てに努力しても、子どもは心理的になかなか成長しないのだ。



次男(24歳)は富士河口湖町の会社に勤め、社員寮に住んでいます。土日に洗濯物をもって家に帰ってきたときくらいしか顔を合わせません。低学年のころは、おしゃべり好きで、聞いてもないことまで話していました。妻は心配(興味?)もあるので、次男からいろいろ聞き出そうと質問していますが、低い声で何と言っているか聞き取れないくらいのボリュームで「ボソッ」と答えています。